

エビデンスとナラティブの関係 -高齢者ケア専門職の実践知を安全管理に反映させるための検討-

村山 明彦¹

Relationship of evidence and narrative
— A study reflecting the practical knowledge of elderly care
professionals in safety management —

Akihiko MURAYAMA

要 旨

近年、医療専門職の経験・勘などの実践知を、科学的に検討する研究が増加しつつある。しかし、高齢者ケア専門職の実践知を検討した研究は少ない。そこで、高齢者ケア専門職の実践知を言語化（ナラティブの概念化）して、他的高齢者ケア専門職とこれらの概念を共有・蓄積（エビデンスの概念化）することは、高齢者ケアの現場での方法論として有益なツールになると推察した。本研究では、高齢者ケア専門職の実践知を、日々の安全管理に反映させるために必要な知見を提言することを目的とした。本研究は文献研究である。本研究の目的を遂行するために、以下の手順で論を展開した。まず、先行研究を踏まえ、本研究における実践知を定義するための理路を提示した。次に、エビデンスとナラティブに関する先行研究からの知見を援用した。そして、これらの結果を統合して安全管理に反映させるための提言を行った。今後は、今回の提言を高齢者ケアの現場で検証していくことが必要である。

Abstract

Studies to scientifically examine practical knowledge such as experience and intuition of healthcare professionals have been increasing in recent years. Verbalizing practical knowledge of elderly care professionals (called concept of narrative) as well as sharing and compiling the practical knowledge with other elderly care professionals (called concept of evidence) may become valuable tools for elderly care settings. The present study, based on a literature review, examined the factors required for reflecting practical knowledge of elderly care professionals in daily safety management. In order to achieve the objectives of this study, I conducted a discussion in the following order: showing a method to define practical knowledge based on previous work, examining the relationship among practical knowledge, evidence, and narrative, and providing recommendations that reflect all the above results in safety management. In the future, it will be necessary to investigate these recommendations in elderly care settings.

キーワード：エビデンス，ナラティブ，実践知

Key word : evidence, narrative, practical knowledge

I. 問題の所在と研究目的

近年の介護事故については、次のような指摘がある。介護保険制度導入以降、介護事故をめぐる紛争や訴訟が増加しており、高齢者ケアの現場においては、これまで以上に高い安全配慮義務が求められるようになっている(三田寺ら2013:123)。その背景には、これまでの高齢者ケアには経験が重んじられた点があると言える。平川は、各専門職の経験と勘、漠然とした施設基準によって多くのケアが行われてきたという点を否定できないと言及している(平川2008:343)。このため、高齢者の安全管理には、科学的根拠に基づいたケアの立案と実践が求められるようになっている。一方、エビデンス至上主義的管理が、実践者を追い込み、実践者のモチベーションと観察力を低下させているという懸念もある(川島2007:230)。

高齢者ケアの実践には、専門職の主観的な判断を数多く含む。それゆえ、高齢者ケアの実践は不確かで曖昧な感覚を残しやすい。そして、主観であるがゆえに捨象されやすく、アセスメントにおいて言語化・共有化が図られず、個人の経験として内在化されやすいという課題がある(鈴木2015:781)。しかし、高齢者ケアにおける不確かで曖昧な感覚にこそ、重要なケアの根拠が含まれているとの報告もある(鈴木2010:225)。これまでのところ、上述したような専門職の主観的な判断のプロセスを言語化した試みは少ない。

本研究における高齢者ケア専門職とは、介護保険制度における看護・介護職員の定義に準ずるものとした。高齢者ケア専門職の主観に基づいた、「経験」「勘」「わざ」「知恵」に象徴される知見は、実践知として定義されている。そして、実践知は科学として認識された知と区別されてきた経緯があった(池川2005:1)。近年、医療専門職の実践知を科学的に検討する研究が増加しつつある。例えば、Hainesらが行ったエビデンスレベルの高い研究において、看護師の臨床判断が、信頼性と妥当性のある転倒予測ツールより、病院での転倒予測の手段として好ましいと報告している(Hainesら2007:664)。看護学校の卒業直後で経験年数が少ない(Myersら2003:158)か、あるいは患者の転倒リスクの予防について教育を受けていない看護師(Hainesら2006:168)では臨床判断の有用性に否定的な結果が報告されていることから、経験がその有用性を高めて

いるものと考えられる。また、入院患者の転倒リスク評価に理学療法士の臨床判断を用いた場合、何も介入を行わないより費用対効果が有意に良かったとの報告(Hainesら2009:448)がある。しかし、臨床判断による転倒予測における確かさや、その判断根拠となる視点について明らかにされておらず、予測の有用性の評価までには至っていない(松田ら2013:719)。また、高齢者ケア専門職の実践知を検討したものは、非常に少ない。

これらの諸点を踏まえて、高齢者ケア専門職の実践知を言語化(ナラティブの概念化)して、他的高齢者ケア専門職とこれらの概念を共有・蓄積(エビデンスの概念化)することが、現場での方法論として有益なツールになると推察した。そこで、本研究では、高齢者ケア専門職の実践知を、日々の安全管理に反映させるために必要な知見を提示することを目的とした。

II. 研究方法

本研究は文献研究である。選択する文献は、以下の手順で検索した。まず、国立情報学研究所の学術コンテンツ・ポータル内にある、データベースCiNiiを用いて、和雑誌・紀要の論文検索を行った。キーワードは、「実践知」「経験」「勘」とした。これらのキーワードに関係すると思われる内容を吟味の上選定した。また、抽出される文献数が少ないことが予想されたため、国立情報学研究所が提供するWebcat Plusを用いて、上述のキーワードで書籍の検索も行った。そして、抽出された文献は、社会福祉学、医学、看護学などの関連領域に限定せず、行動経済学、文化人類学、心理学、教育学などの領域の文献も併せて検討することとした。これらの文献を併せて検討する理由は、アナロジー(既知の世界「ベース」と未知の世界「ターゲット」の間に構造的類似性を見出し、理解を促す方法)の考え方を取り入れたためである。アナロジーは検証の方法でなく、発見の方法である。今回取り上げる課題のように前例の少ないものや、未知の領域で仮説を導くために行われる方法である(井上2014:52)。このような文献研究の方法は、村山が採用している(村山2015:82)。

本研究の目的を遂行するために、以下の手順で論を展開していく。まず、抽出された文献を踏まえ、本研究における「実践知」を定義するための理路を提示する。この際、以下のように大別して検討することとした。

①ケアの対象となる高齢者の行動に関する知見（アノマリー）、②高齢者ケアを提供する環境に関する知見（現場の機能）、③高齢者ケア専門職の経験・勘に関する知見（直感の科学）、④高齢者ケア専門職の主観を言語化する取り組みに関する知見（危険予知トレーニング）の4点である。次に、エビデンスとナラティヴの双方、またはいずれかに関する言及がある先行研究からの知見を援用した。そして、「実践知」におけるエビデンスとナラティヴの関係を明確にしてい。最後に、これらの知見を統合して、安全管理に反映させるための提言を行う。

III. 関連する先行研究

1. アノマリー

ケアの対象となる高齢者の行動に関する知見に着目した。行動経済学では、人間が合理的な行動をとらない事例をアノマリー（伝統的な経済学では答えることができなかった様々な謎や矛盾）と呼ぶ（多田2014:4）。行動経済学の分野においては、一見自己の利益に反するように見えるアノマリー的な行動も、単に怠惰や現実逃避の性格という記述のみで片付けてしまうのではなく、進化の過程で脳が獲得した生物学的合理性に基づく現象の1つとしてとらえる考え方が普及しつつある（依田ら2009:192）。Kahnemanらは、人間が系統的にアノマリーを示す点に着目し、アノマリーを意味のない現象として切り捨てるのではなく、その現象の中に、人間が経済学の想定する規範的合理性とはかけ離れた意思決定を行っているという事実を示した（Kahnemanら1979:263）。そして、人間の意思決定は基本的には理性的なプロセスによってなされるものの、感情を含む多様な認知バイアスが介在することによって必ずしも合理的な判断とはならない可能性を指摘した（Kahneman2003:162）。

医学の分野においても、行動経済学的分析手法に着目し、血糖コントロールの悪い2型糖尿病患者のアノマリー（どのように合併症の恐れしさを伝え教育しても、食べ過ぎと運動不足を解消することは極めて難しいこと）に着目し、その性向の解析を試みた報告などがある（江本, 2012:201; 江本2013:78）。

高齢者ケアの現場では、認知症の高齢者も多く、「合理的な行動をとらない」ことを単に行動経済学の観点からのみ解釈することや、行動を断定できない場合

が少なくない。また、高齢者自身が「可能な行動」であると判断したものの、身体活動が伴わないため、「不可解な行動」として表出されることも考えられる（実際の身体機能と自己効力感の相違）。このような高齢期を迎えた要介護高齢者の生物学的事象と、アノマリーの複合性を実践知として検討する有用性が示唆された。

2. 現場の機能

高齢者ケアを提供する環境に関する知見に着目した。高齢者ケアを提供する環境は、多岐にわたる。近年、従来からの介護保険施設（特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、介護療養型医療施設）だけでなく、認知症高齢者グループホーム、有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅などを利用する高齢者が増加している。ケアの対象者が異なれば、ケアの方法が異なるように、ケアを提供する環境に応じた実践知の検討が必要であろう。

人間の行動に対する帰属に関しては、内的帰属（個人の性格・能力）と外的帰属（環境内の要因・状況内の諸要因など）に区別される。内的帰属と外的帰属は対等な重みをもつのではなく、内的要因を外的要因よりも重視しやすい傾向がある（外山2001:19）。そして、環境分析を行わずに、行動を内面的に解釈しようとする傾向を基本的な帰属のエラーと呼ぶ（Ross1977:173）。

馬場は、医療の専門家が「疾病」を「治療」し、福祉の専門家が「弱者」を「援助」するノウハウではなく、人それぞれが生きていく中で「病い」「老い」とどう向き合い、人と人とはどのようにつながりを持ち助け合っていくのかを、人が生きている現場の中からみつけていくことの必要性を強調している（馬場2013:301）。ここでいう、現場とは、さまざまな人々が相互に関係し合う場であり、その内部に入ってみてはじめてわかる独特の世界である。医療事故などの原因の解明には、作業現場や組織全体にわたる「事故の文脈」に視野を広げ、それが生じる現場のあり方を、内部の視点から明らかにする必要がある（小田2011:25-49）。

事故の要因は、現場の機能によって異なる（日本看護協会2002:424）。また、高齢者ケアの現場に限った場合、既存のアセスメントだけではハイリスク者を判別できないとの指摘がある。対象者のほぼ全員がハイリスク者に該当するからである（征矢野2007:40）。

高齢者ケアの現場における安全管理には、このような背景を考慮した実践知を構築する必要があるであろう。

3. 直感の科学

高齢者ケア専門職の経験・勘に関する知見を、心理学などの先行研究を踏まえて検討することで、本研究における実践知を構築する一助とした。

近年、心理学領域をはじめ、その周辺領域である認知科学、脳科学などの領域で、人間の認知過程を意識的過程と無意識的過程に分けるフレームワークである、二重過程理論が注目されている。中でも、脳科学をはじめとした周辺領域の知見と合わせ、無意識的過程の重要性が認識されるようになった(石澤ら2014:246)。

グラッドウェルは、専門家が理屈ではなく直感により一気に結論に達する脳の働きを適応的無意識と呼び、いくつかのエピソードを提示している(グラッドウェル2006:9-21)。山中は、医療現場での適応的無意識の例として、ベテラン看護師の「あの患者さん、何となく様子がおかしい」という直感は、たいていの場合、急変を正確に予見するという具体例を紹介している。そして、適応的無意識はトレーニングで鍛えることが可能であると、現場での教育の意義について言及している(山中2013:1011)。

直感は、脳の進化した知的能力と環境に根差した無意識の経験則、に基づいて、素早く意識にのぼる。経験則は脳だけでなく、環境にも根差している。直感自体は、良いも悪いもなく、合理的でも不合理でもない。直感の価値は、経験則を使用する状況によって変わる(ギーゲレンツァー 2010a:71-72)。また、適応的無意識は、即時的な視点を予測するものであり、長期的な視点を予測するものではない。現在の環境に、迅速に反応し、巧みにパターンを検出し、目標志向行為を始動させる。しかし、明日、次週、あるいは来年何が起こるかを予想することはできない(ウィルソン2005:68)。このため、このような考えを応用するには、実践と観察という内省的な試みが必要である(村田2005:292)。

上述した知見を参考にして、高齢者ケア領域で応用的に活用する意義が示唆された。このためには、高齢者ケア専門職の経験や勘を日常的に表出することが必要になると考えられた。

4. 危険予知トレーニング

ケアの対象となる高齢者と環境の相互関係を踏まえたうえで、高齢者ケア専門職の経験や勘を実践知として検討するには、日々の業務において、それらを表出・

共有する機会が必要になると考える。本節では、高齢者ケアの研修において数多く実施されている危険予知トレーニング(Kiken-Yochi Training, 以下KYT)に着目した。

KYTとは、場面設定のイラストシートの中に潜む危険要因と、それが引き起こす現象をチームメンバーが本音で話し合うことによって見出し、感受性や集中力、また問題解決能力を高めようとするトレーニング方法である(中央労働災害防止協会2003:39-54)。KYTは医療現場、看護教育、介護現場等においても活用されている(兵藤2007:185)。KYTの方法論としては、「どんな危険がひそんでいるか?」(現状把握)、「これが危険のポイントだ」(本質追究)、「あなたならどうする」(対策樹立)、「わたしたちはこうする」(目標設定)という、4つの質問を参加者に繰り返し問いかける。4種類の質問構成となっているので、これを4ラウンド法という。最後に、インストラクターが参考となる見方を例示しながら、考え方の筋道を教える(神山ら2013:3)。

KYTでは、場面設定が図示されたテキストを用いることが多い。しかし、窪田は、実際に起きた事故レポートを用いたKYTを推奨している。これには、より身近で現実的な問題を含んでおり、参加者が興味を持って取り組めるうえに、結果を実際に生かすことができるという利点がある(窪田2006:194)。

このように、KYTには様々な技法があるが、毎日訓練すること、短時間に集中して実践することを重要視している(相馬2006:31)。KYTには、各個人のリスク感性や問題解決能力を向上させる効果がある。一方、日々の多忙な業務の中で、KYTを導入することには壁があることも指摘されている(社団法人神奈川県看護協会2007:2-3)。

これらの点を勘案して、研修などの限られた時間ではなく、KYTを参考にした取り組みを日常業務の中に採用していくことが、実践知の構築に有用と考えられた。

IV. 小括

1. 本研究における実践知

見かけ上は同じ経験をしていても意味づけが違えば、当然経験の質が違ってくる。この経験の質を理解していくことが、実践知の解明や実践教育にもつながると考えられる(池田ら2009:103)。

高齢者ケアの現場では、様々な経歴を有する専門

職が協働している。例えば、同じ職種で、同じ臨床経験年数であっても勤務してきた環境（在宅・通所・入所など）が異なれば、経験の質は異なる。職種が異なれば、この差はさらに大きくなる。このため、高齢ケア専門職各々の経験、それに基づいた主観を表出した際のプロセスを明確化する必要があると考える。さらに、高齢者ケアの現場で共有可能な言語であることが求められるであろう。ここで言う経験とプロセスとは、西内の見解を参考にした。つまり、自らの経験を誰からも見えるように、データで可視化したものを指す。そして、可視化した経験から判断するプロセスを提示することである（西内2011:16）。

上記の諸点と、先行研究からの知見を援用して、本研究における「実践知」を定義するための理路を提示する。ここでは、高齢者ケアの現場において、高頻度で発生する転倒事故を例にして考えることとする。

要介護高齢者が尿意・便意が逼迫したことに起因して、介助者を待たずに一人でトイレに向かって転倒する事故などが、アノマリーに該当するであろう。そして、アノマリーは要介護高齢者特有の転倒関連行動とも類似すると解釈できると思われる。類似した事故を予防するために、対象者の居室内にポータブルトイレを設置したとする。この場合、高齢者ケア専門職にとっては事故予防策であったとしても、対象者がトイレという認識を持っていなければ、同様の事故が繰り返されるであろう。また、介助者を待たずに一人でトイレに向かって転倒する行動の背景には、排泄場面を他者に見られたくないという羞恥心に起因する場合もあると推察できる。このように、1つのアノマリーには複数の理由や個別性が潜むことを常に考慮する必要があると考える。次に、アノマリーは、対象者の性格・志向だけでなく、高齢者ケアの現場特有の環境が起因となることも並行して考慮するべきであろう。現場の機能の箇所にて言及した現場の考え方を基に、アノマリーを考えるのであれば、介助者を待たずに一人でトイレに向かっても転倒しにくい環境整備を、事故予防策の一例として提案できるであろう（動線上に、手すりや福祉用具の設置を行うなど）。また、高齢者ケアの専門職が当然と感じている接遇が、対象者にとっては、依頼しにくい状況を作り出していることも考えられる（トイレに行きたいのでナースコールを押したが、対応が威圧的であったなど）。このような場合は、高齢者ケアの現場全体の接遇の改善

を行わなければ、同様の事故が無くならないと思われる。このように、要介護高齢者の行動における、内的帰属と外的帰属の相互関係を常に考慮する姿勢が求められると思われる。

また、高齢者ケア専門職の直感に基づいた気づきが、有効と思われる期限（気づきの賞味期限のようなもの）を設定することが必要であろう。これには、直感の科学の箇所では言及した、ウィルソンの適応的無意識は、即時的な視点を予測するものであり、長期的な視点を予測するものではない（ウィルソン、2005:68）という考え方が参考になる。つまり、ケアプランで用いられるような中・長期的な目標の期間設定ではなく、高齢者ケアの現場で行われる申し送りの間隔程度（例えば、朝と夕の申し送りまでの数時間とする）に設定することである。これにより、高齢者ケア専門職の直感に基づいた気づきと、立案した事故予防策のアセスメントが、同時にかつ迅速に行えると考えられる。さらに、KYTの長所と課題を踏まえて検討することが、安全管理に寄与すると考えた。これには、KYTの箇所では言及した、高齢者ケアの現場で発生した事故レポートを用いたKYTを推奨するという窪田の考えが参考になる（窪田2006:194）。例えば、申し送り内で伝達された事故に対する予防策（直感に基づいた気づき）を共有して、次の申し送りまでは、各専門職が統一したアプローチとアセスメントを行うことが、具体例として挙げられる。KYTのための独立した時間を設けるのではなく、日々の業務でルーティン化されている申し送りの時間内で、このような取り組みを行えば、KYTの概念を導入するための障壁が低くなると推察する。また、当日の申し送り担当者が、直感に基づいた気づきを発表するなどのルールを設定すれば、協働する他の専門職と共有可能な言語として表現する能力を高めることにもつながると思われる。

以上のことから、本研究における実践知を、「高齢者ケア専門職の所属する現場での経験と、ケアの対象者に対する直感に基づいた気づきを、協働する他の専門職と共有・蓄積する能力」と定義した。

2. 実践知とエビデンスとナラティブの関係

本研究における実践知とエビデンスとナラティブの関係を検討して、実践への提言を行うための一助とする。

安全管理で用いられるリスクという言葉は、2つの意味を持つ。経験的データに基づいて確率や頻度のよう

考える結果のそれぞれに数字を当てはめることができない、あるいは当てはめることが好ましくない状況では、「リスク」の代わりに「不確実性」という言葉を使う(ギーゲレンツァー 2010b:48).このような条件下で判断を下すには、2種類のツールが必要になる。リスクが既知の場合、良い判断を下すには論理的かつ統計的な思考が必要である。一方、未知のリスク(不確実性)が存在する場合、良い判断を下すには直感と経験則も必要になる。(ギーゲレンツァー 2015:42).この考え方を参考にすると、「リスク」に対しては、エビデンスの概念が求められる。一方、「不確実性」に対しては、エビデンスとナラティブの概念が求められると解釈できる。つまり、高齢者ケアの現場で明らかとなっているリスクに関しては、各種のガイドライン(エビデンスの概念が多分に含まれている)を活用する。一方、不確実性が含まれるような事象に関しては、各種のガイドラインと本研究における実践知(ナラティブの概念が多分に含まれる)が活用できると考えられる。

本研究における実践知として定義した考えと、ナラティブの概念を結びつける考え方としては、「セオリーを承知の上で、個人が現場をとらえ、経験から直感的に判断するときには生じる内心の言葉がある。これがナラティブである」と言及する森岡の見解がある(森岡 2015:7-8).これらのことを実践すれば、藤田が提案する「エビデンスを基に対話が重ねられ、ナラティブが蓄積・更新されていく。その過程で、エビデンスは以前のナラティブと擦り合わされて、更なるナラティブを生む働き」(藤田2008:31)を実現できる可能性が高まると思われる。

V. 実践への提言

事故を繰り返す要介護高齢者は、再発防止策を検討している間にも、事故が発生することがある。このため、迅速に再発防止策を立案する必要がある(村山 2012:78).中田は、事故の構造は「手遅れになる前に異常に気づかないこと」であると言及している。そして、「気づくようにする工夫」と「手遅れになるまでの時間の余裕を増やす工夫」とに分けて対策を絞ることを推奨している(中田2013:227)。

実践への提言として、本研究における実践知の概念を、高齢者ケアの現場で行われる日々の申し送りにて、安全管理に活用することを推奨する。このような取り

組みを日々の業務で実行していくことが、本研究における実践知とエビデンスとナラティブの関係をより強固にしていくと推測する。これには、高齢者ケアの現場にて奏功した事例だけでなく、効果の得られなかった結果も含めて蓄積することが有用と思われる。このことで、類似した事例に対しても活用可能な、高齢者ケアの現場独自のデータベースが作成できるからである。今後は、今回の提言を高齢者ケアの現場で検証していくことが必要である。

VI. 文献

- 馬場雄司(2013)「医療・福祉の原点を求めて-「生活」を体験し、「生活」を見直す-」『医学教育』44(5), 299-306
- 中央労働災害防止協会編(2007)『危険予知訓練』, 中央労働災害防止協会
- 江本直也(2012)「糖尿病患者に対する行動経済学的アンケートの有用性の検証」『行動経済学』5(1), 201-203
- 江本直也(2013)「行動経済学的アンケートによる糖尿病患者の病型病態分析」『行動経済学』6(1), 78-80
- 藤田裕司(2008)「ナラティブとエビデンス-二つの「計画」をつなぐもの-」『大阪教育大学障害児教育研究紀要』31(1), 21-34
- ゲルト・ギーゲレンツァー著, 田沢恭子訳(2015)『賢く決めるリスク志向 ビジネス・投資から, 恋愛・健康・買い物まで』, インターシフト
- ゲルト・ギーゲレンツァー著, 小松淳子訳(2010a)『なぜ直感の方がうまくいくのか? 「無意識の知性」が決めている』, インターシフト
- ゲルト・ギーゲレンツァー著, 吉田利子訳(2010b)『リスク・リテラシーが身につく統計的思考法 初歩からベイズ推定まで』, 早川書房
- Haines TP, Hill K, Walsh W, et al. (2007) 「Design-related bias in hospital fall risk screening tool predictive accuracy evaluations: systematic review and meta-analysis.」『The journals of gerontology. Series A, Biological sciences and medical sciences』62(6), 664-672
- Haines TP, Bennell KL, Osborne RH, et al. (2006) 「A new instrument for targeting falls prevention

- interventions was accurate and clinically applicable in a hospital setting」『Journal of clinical epidemiology』59(2), 168-175
- Haines T, Kuys SS, Morrison G, et al (2009) 「Cost-effectiveness analysis of screening for risk of in hospital falls using physiotherapist clinical judgement」『American Public Health Association Medical Care Section』47(4), 448-456
- 平川仁尚 (2008) 「高齢者介護施設における終末期ケアの標準化と個別化」『日本老年医学会雑誌』45(3), 343
- 兵藤好美 (2007) 「看護学生のヒヤリ・ハット傾向と危険予知トレーニングの実践」『看護展望』32 (2), 185-192
- 池田耕二, 玉木彰, 山本秀美他 (2009) 「認知症後期高齢患者に対する理学療法実践知の構造化ー構造構成的質的研究法をメタ研究法としたメモリーワークとM-GTAのトライアングレーションによる事例研究」『心身健康科学』5(2), 102-108
- 池川清子 (2005) 「最新看護学講座【いま, 看護の原点を問う】看護の実践知ー経験の意味するもの」『神戸市看護大学短期大学部紀要』24(3), 1-7
- 井上達彦 (2014) 『ブラックスワンの経営学ー通説をくつがえした世界最優秀ケーススタディ』, 日経BP社
- 石澤亜耶乃, 島田英昭 (2014) 「ワーキングメモリの負荷が共感的反応に及ぼす影響ー二重過程理論に基づく検討」『認知科学』21(2), 245-253
- Kahneman D, Tversky A (1979) 「Prospect theory: An analysis of decision under risk」『Journal of the Econometric Society』47(2) 263-291.
- Kahneman D (2003) 「A psychological perspective on economics」『The American Economic Review』93 (2), 162-168.
- 神山資将, 佐々木由恵 (2013) 「KBMに基づいた, 医療・介護職間の危険予知トレーニング」『知識共創』3(1), 1-9
- 川島みどり (2007) 『看護を語ることの意味ー“ナラティブ”に生きて』, 看護の科学社
- 窪田美行 (2006) 「KYTの実際と今後の課題ー医療現場におけるKYTの実際ーマネジメントの視点から【実践から学ぶ・1】」『看護管理』16(3), 194-200
- マルコム・グラッドウェル著, 沢田博・阿部尚美訳 (2006) 『第1感「最初の2秒」の「なんとなく」が正しい』, 光文社
- 松田徹, 吉田晋, 井上美幸他, (2013) 「理学療法士の臨床判断による転倒予測の視点と予測の確かさー臨床経10年以上の理学療法士での検討ー」『理学療法科学』28(6), 719-726
- 三田寺裕治, 赤澤宏平 (2013) 「介護保険施設における介護事故の発生状況に関する分析」『社会医学研究』30(2), 123-130
- 森岡正芳編著 (2015) 『臨床ナラティブアプローチ』, ミネルヴァ書房
- 村田光二 (2005) 「監訳者あとがき」『自分を知り, 自分を変えるー適応的無意識の心理学』, 新曜社
- 村山明彦 (2015) 「エビデンスとナラティブの関係ー施設入所高齢者のケアモデルを立案・実践するための視点抽出の試みー」『最新社会福祉学研究』10 (1), 81-88
- 村山明彦 (2012) 「次の手を打ちやすい転倒・転落ケースの生かし方」『臨床老年看護』19(6), 74-78
- Myers H, Nikolett S (2003) 「Fall risk assessment: a prospective investigation of nurses' clinical judgment and risk assessment tools in predicting patient falls」『International journal of nursing practice』9(3), 158-165
- 中田亨 (2013) 『ヒューマンエラーを防ぐ知恵』, 朝日文庫
- 日本看護協会 (2002) 「転倒・転落による事故を防ぐ」『医療・看護安全管理情報』9(1), 424
- 西内啓 (2011) 『世界一やさしくわかる医療統計』, 秀和システム
- 小田博志著, 波平恵美子編 (2011) 「文化人類学と質的研究」『文化人類学』, 医学書院
- Ross L (1977) 「The intuitive psychologist and his shortcomings: Distortions in the attribution process」『Advances in experimental social psychology』10(1), 73-220
- 相馬孝博監訳 (2006) 『患者安全のシステムを創るー米国JCAHO推奨のノウハウ』, 医学書院
- 征矢野あや子 (2007) 「リスクアセスメントの有効性とエビデンスに基づいた実践活用」『ナーシングトゥデイ』22(12), 40-46
- 社団法人神奈川県看護協会 医療・看護安全対策委

- 員会 医療危険予知訓練の手引きワーキンググループ (2007)『保健医療福祉分野における 危険予知訓練の手引き』, 社団法人神奈川県看護協会
- 鈴木俊文 (2015)「介護職員の「経験や勘に基づく実践」の分析 「いやがる感じ」という「だいたいの目安」」『日本認知症ケア学会誌』13(4), 781-789
- 鈴木俊文 (2010)「介護職員が認知症者とのコミュニケーションにおいて経験している「不確かな感覚」; 現象学的記述を用いた意味解釈の試み」『認知症ケア事例ジャーナル』3(3), 225-231
- 多田洋介 (2014)『行動経済学入門』, 日本経済新聞出版社
- ティモシー・ウィルソン著, 村田光二監訳 (2005)『自分を知り, 自分を変える 適応的無意識の心理学』, 新曜社
- 外山みどり (2001)「社会的認知の普遍性と特殊性: 態度帰属における対応バイアスを例として」『対人社会心理学研究』1(1), 17-24
- 山中克郎 (2013)「Quick Assessment シマウマ探しはするな!」『JIM』23(12), 1011
- 依田高典, 後藤励, 西村周三著 (2009)『行動健康経済学-人はなぜ判断を誤るのか』, 日本評論社